©神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

短編小説 ● 佳作③

宮ケ瀬の幻影

相川 和彦 作

あいかわ・かずひこ　本名・愛川一彦（あいかわ・かずひこ）。1974年生まれ。会社員。川崎市高津区。

植林帯の、なだらかな坂道が続いていた。高く生い茂ったブナの隙間からは、朝日が差し込んでくる。だが視界が開ける場所が少ないため、単調さは否めなかった。

45リットルザックの重みが徐々に肩へ食い込んでくる。腕時計を見れば、宮ケ瀬登山口から一時間が経過していた。そろそろ御殿森ノ頭へ着いてもいいはずだが――。私は立ち止まり、とめどなく流れ落ちる汗をタオルで拭った。ザック横のポケットに入れたペットボトルを抜き出し、いくらか水を飲む。

日本百名山である丹沢山は、山頂までの距離が長いことでも知られていた。ルートはいくつもある山だが、どのルートで登っても往復十時間くらいはかかる。水場も少ないため、がぶがぶ水を飲むわけにもいかなかった。

気を取り直し再び歩き始める。朝の六時を過ぎたばかりだから人気もなく、自分のペースで歩けていた。三十分ほど歩き、高畠山の巻道にさしかかったときだ。私は小便がしたくなり、道端にザックを置いた。前後を見ても人がいない。今日はまだ暗いうちに、登山口で老夫婦らしき男女に会って以来、誰とも会っていなかった。私は登山道から外れ、山林を伝い奥深くまで入り込んでいった。振り返り、山道が見えなくなったあたりでチャックをおろす。まだ冷気が残る、爽やかなマイナスイオンの中での小便は気持ちがよかった。

「ん？」五十メートル位の距離か。何かが動く気配がした。静寂の中だから、ちょっとした変化にも気づきやすい。するとまた微動の風が揺れ、木から木への移動が感じられた。

「何だ、驚かせるなよ」こちらをじっと見つめていたのは鹿だった。丹沢には小動物を中心として、数多くの生き物が生存している。あの立派な角はニホンジカだろうか……。近くに来れば大きくて怖いだろうが、このくらいの距離で見ていれば可愛いものだ。そして数秒、私と鹿は見つめあう。次の瞬間だった。

鹿の喉元に矢が刺さっている。錯覚かと思ったが、目を凝らしても映像に変化はない。鹿も瞬時の出来事で、生命の危機を感じるまでわずかな時間を要した。そして急激に暴れ出し、身体を上下左右へと身もだえさせた。

あまりの出来事に、私は口を開けたまま眺めているしかなかった。慌ててチャックを閉め、矢が放たれたと思われる方に顔を向ける。

時を置かず、籠を背負った二人の男が、何かを言い合いながら樹林帯の中を歩いてきた。二人の側には猟犬らしき犬も歩いている。私は咄嗟の判断で太い木の陰に身を隠した。必死で考えを整理する。早朝の丹沢山付近で一体何が起きているのか？　あれは狩りであろう。しかしこの時代、狩りは認められるのか？

木陰から少しだけ顔を出し二人の方を見た。毒でも回っているのか鹿はひくひく虫の息だ。

白髪を伸ばし放題の年配の男が、筋肉隆々の年若い男へ、何か指示を与えた。すると若い男は、腰に下げた鞘から鋭い剣のような刃を抜き出し、鹿の頸動脈を迷いなく切った。ここからはっきりとは見えないが、いわゆる血抜きをするつもりだろう。

困ったな。私は途方に暮れた。ザックも置きっぱなしだから、すぐに登山道へ戻りたいが、いま木陰から出れば恐らく彼らの視界に入るだろう。かといって、ここでずっと待つのか。血抜きの後は内臓を取り除いていく処理だ。それにはかなりの時間を要するだろう。

待ってはいられないと判断し、私はせめての悪あがきで匍匐前進にトライした。先月三十五歳を迎えたばかりだが、二十代前半までのようなバネはすでにない。それが証拠に、匍匐前進の途中で彼らに気づかれた。若い男が、まるでカモシカのように躍動感ある走りでこちらへ向かってくる。私は立ち上がり、一応は身構えた。まさか矢を射ってはこないだろうが、こちらに危害を加える可能性は十分にある。近づいた男は意外にも、いい物を身に着けていた。動きは野生そのものだが、アウトドアで有名なブランドの、しかも材質のよいウエアやパンツ、時計もつけている。

「ここで何をしている？　我々のことを見ていたのか？」二十代前半と思しき男は、眉が太く、鋭い眼光に鼻筋が通り、体躯もがっしりしていた。向こうで犬と共に佇む年配者も、同じようにいい体格だ。一体何者なのだ？　私は自分の危機的状況も忘れ、興味をもった。

「久しぶりの丹沢登山に来ただけだ。そこで小便をしていたら、偶然見てしまった」

若い男は無表情のまま。私の答えを携え後ろの男へ伝えにいく。そしてすぐ戻ってきた。

「このまま帰すわけにはいかない」と胸を張り、わかりやすい威圧ですごんでくる。

「それは困る。こちらは登山に来ただけだ。いま見たことも、他に口外するつもりはない」

正直、私はいま見た光景を完黙できるか、自信はなかった。だが今は繕うしかない。

「ダメだ。七百年の歴史がそれは嘘だと物語っている」男の怪しい言葉にぞっとする。

「何だ？　その七百年て。私は山仲間に今日の登山のことを話している。登山届も出した。もし私が戻らなければ、すぐに遭難の連絡が警察に行くことになるぞ」私の言葉で男の頬が動いた。明らかに警察という言葉に動揺している。こちらへ近づいてきた年配者へ相談を始めた。今のうちに走って逃げようと思ったが、若い男にすぐ追いつかれるのがおちだ。

「夕方には帰してやる。だが一旦、我々と来てもらおう」年配の男がかすれた声で言う。

「断る！」私は二人に背を向け山道へ戻ろうとしたが、腕をつかまれ、捻られた。痛さが尋常ではない。生命の危機を初めて感じた。ザックが残っていると別の登山者が通報する恐れがある、そのことを訴え、ザックを取りに行くことだけは許された。もちろん若い男がぴったりとついてくる。このタイミングで、ひょっこり他の登山者が現れてくれることを期待したが、残念ながらひとっこ一人姿は見えなかった。私が怠慢な動きでザックを背負い、靴紐を結んでいると、「早くしろ！」と男が脅してくる。矢といい剣といい、彼らが好戦的で、情など通じないことは明らかだった。

再び山道を外れ、先程の鹿の死に場所まで戻った。年配の白髪男はクスリとも笑わず、鹿の肉を切り裂いていた。白髪男はこちらに気づくと、鹿の肉と皮をそれぞれ竹製の大きな籠に入れ、立ち上がった。

「帰るぞ」若者に短く伝える。すると二人はその場で両ひざをつき、山の恵みに感謝する様な言葉を、鹿の死骸へ捧げた。

「ついてこい」白髪男が犬を連れ林道を歩き出す。仕方なく私は彼の後を歩き始めた。その後ろには若者。挟まれた格好だ。確信はないが、彼らは私を殺しはしないだろう。野性味をもった体格のいい二人だ。殺すつもりなら、もうとっくに殺している。かといって、内心は怖くて仕方なかった。山奥まで連れていかれ、何をされるのか？　悪い想像は膨らむ一方だ。やがて林道は沢に行きついた。岩を下る山水の清流はひとときの不安を忘れさせた。

前後の男たちは極端に無口で何も話さない。ただ犬を連れ黙々と沢伝いに山を登っていく。どう見ても登山コースからは外れているが、不思議なことに道はできていた。ということは、この先に他の人間も居るということか。

「あんた達は一体何者なんだ？　まさかこの山の住人か？」追い込まれた私はたまらず訊いてしまった。先程から二人を観察していたが、山道を歩く姿、倒木や藪のかわし方、沢の岩場を難なく渡り歩く技術、どれをとっても素人には見えない。ベテランのクライマーとも違う。山を根城にしている獣のようだ。私は恐怖も忘れ時折感心してしまった。

「余計な口をきくな。黙ってついてこい」

身体同様、贅肉を全てそぎ落としたかのような言葉が、私を怯えさせる。

山岳部だった高校時代を含めれば、私の登山歴も短くはない。東日本の主要な山へ登ってきた自負もある。だが現時点において、ここが山のどこなのかさっぱりわからなくなっていた。ここまでのルートを必死に覚えようとしたが、男たちは巧みにルートを荒らした。

ようやく道が平たんになってきた所で、男たちは私を山道脇の石に座らせた。そして有無を言わせず布で目隠しされる。ゴールが近い事を意味しているのか。若い男に肩をつかまれたまま、私はそこから数十分、視覚を奪われて歩いた。やや精神が参りかけた時だ。鼻から上を覆っていた布がはぎ取られ、視界が良好になった。生きた心地がした。

驚いたのは、目の前に広がる敷地だ。山の斜面を切り崩したような土地に、段々の畑があった。こぢんまりとした牧場に近い草場もあり、牛や羊も十数頭散見できた。日本にこんな中空都市が存在したのかと呆気にとられる。そこはちょっとした集落をも形成しているようで、藁葺きの家がいくつかあった。家々の中心には小屋があり、私はそこへ連れていかれた。土蔵のような空間を想像していたが、中は意外と新しく清潔だった。藁葺きは表側だけで、中は現代風にアレンジされていた。

登山靴を脱ぎ板敷の床に座ると、茶を出された。「少し待っていろ」白髪男が不愛想に言い置く。そして彼らは外から小屋に鍵をかけ、集落の方へと向かっていった。

音のない完全なる静謐に身を置くと、猛烈な寂しさと孤独感が私を襲ってきた。縛られているわけではないが、もはや抵抗する気力は失せていた。空腹ではあったが、さすがに食欲はない。だがこんな時でも尿意は催した。

トイレを探したがそれらしき部屋はない。小屋の奥まで行くと、物置部屋へ通ずるドアがあった。そこでするしかないと思い、私はそのドアをこじ開けた。中は暗い。農機具のような物がいくつか置かれているのはわかった。手探りで進んで行くと何か丸いものを踏み、不覚にも私は転んだ。腰を痛打する。痛んだ部分をさすりながら、悪態をつき、その丸いものを蹴とばした。それは物置のドアにぶつかり、落ちた。小屋内の明かりがその物体に光を与える。しゃれ……こうべ。私は叫び声をあげ、懸命に手と足を動かし物置から出た。そのまま止まらず小屋の扉へ体当たりを食らわす。扉は軋んだが、外からの鍵で開かなかった。私は夢中で何度もその扉へ体当たりを繰り返した。ここから出なければ、恐らく私も生殺しにされるだろう。火事場の馬鹿力とはまさしくこの事だ。七度目で扉は破壊された。外に出ると、少し離れた集落でこちらに気づいた男と目があう。後ろを振り返ることなく、文字通り山から転げ落ちそうな勢いで、私は逃げた。バクバクした心臓ははち切れそうだった。目の前の枝を折り、枯草を踏み散らし、自らに獣が乗り移ったかのような幻想に囚われながら、私は逃げた。しばらく山中をさまよったが、途中で水源を見つけあとは沢沿いに山を下った。山道に出た時は服も上下ドロドロで、登山靴の靴紐も切れていた。ザックは当然置き去りにした。

体力など露ほどしか残っていなかったが、私は宮ケ瀬登山口へと無心で駆けた。拉致されたのだ、といえば警察は信じるだろうか？　それとも奴らに言われた通り、このまま黙っていようか。ふらふらになりながら登山口へと戻った時には、とにかく風呂に入って眠りたい思いだけが、私を包んでいた。

「本当に知らんのか？」居酒屋の個室で、熱燗の徳利を飲み干した六さんがまた訊いてくる。飲み始めて一時間経つが、丹沢山での顛末を全て話した後、六さんはこればかりだ。

彼は私が属する山岳サークルの会長で、七十歳に手が届きそうな今でも矍鑠としている。日本百名山を制覇している兵で、生き字引と称されている私の師匠。警察に届ける前に、まずはこの人に相談しようと決めたのだ。

「勿体ぶってないで、もう教えて下さい！」

少し苛立った私は、六さんをせかした。

「矢口長者の伝説だよ」焼き鳥を齧りながら、六さんは何かを思い浮かべ腕を組んだ。

「丹沢、中津川、宮ケ瀬周辺に残る話でな。時は南北朝時代までさかのぼる」

私の頭は？だらけだったが、独り語りの六さんの話を夢中で聞いた。鎌倉政権を破った新田義貞の息子・新田義興。彼は南朝の雄として活躍した武将だが、やがて反目していた足利尊氏に戦で敗れ、最後は多摩川で自決する。その義興の家臣の一人に矢口信吉という武人がいた。義興を失った彼は郎党を率いて宮ケ瀬の山深くまで逃げ、そこに住み着いた。

「暫くは狩りや牧畜、魚を採って暮らしていたらしい」六さんの言葉で私の記憶が蘇る。あの鹿を射抜いた矢、肉を処理した剣、そして山間の牧場、七百年の歴史という言葉……。

「一族は世を忍んで暮らしていたが、人間という生き物は欲や富には勝てん。そのうち一族は鎌倉まで足を延ばして、育てた家畜なんかで交易をするようになった。相当、裕福になったらしい。だが時代が少し下り、足利政権ができる頃だ。山の麓の青年が、川上から流れてきたお椀を不思議に思い、川を北上していった。すると山奥深くにユートピアみたいな世界が広がっていた。金銀があしらわれた立派なお屋敷に、太った家畜。集落に住む人間達が身に着けた高価な衣服。そこで若者は里に帰り、見たままを話した。すると貧しい暮らしを強いられていた里の住人達は、槍や鎌をもって、大挙山奥へと押し寄せた。矢口一族は、皆殺しにされたらしい」

事実かどうか知らないが、その話に背筋が凍る思いだった。あの男たちはずいぶん用心深かった。山奥で暮らしているわりに、身に着けている物は高価そうだった。そして私が二人の男に連れていかれた場所。宮ケ瀬周辺で、山中奥深い。川上で、家畜を飼っていた。

「六さん、矢口一族は本当に全滅したの？」

自分で訊きながら、どこかで馬鹿馬鹿しいとは思っていた。いや、信じたくなかった。

「伝説では、全滅したことになっている。七百年前の話だぞ。恐らくお前さんは疲れていて、丹沢の狸にでもばかされたんだろう」

そう思いたいが、強くは肯定できない。

「ところで、ザックはどうした？」

「ザック？　当然その小屋へ置き去りだよ」

「え！登山届の写しは？　ザックの中か？」

私は頷き、はっとした。確かにザックには登山届のコピーが入っている。そこには私の名前や住所など、個人情報もいくつか記されてあった。彼らにとって積年の恨み、そして痛恨の失敗は麓の住人に秘密を知られたこと。死に物狂いで阻止すべきは目撃者の排除――。

「まさか。自分で話していて怖気が走るわ。さっきトイレへ行った時、居酒屋の入口付近でデカいのが数人、ウロウロしていた。お前さん、裏口から逃げた方がいい」

六さんの顔面は蒼白になっていた。

講　評

これもまたタイトルにあるとおり、幻想的な小説なのだが、読み進めるにつれてどんどんこわくなる。その後、山の生き字引の六さんが長者伝説について話し出す。この伝説も作者の想像のたまものだったらものすごいことだが、でも、伝説と小説のラストをうまくつなげて恐怖をさらに倍増させた。

（審査員・角田　光代）

第50回 神奈川新聞 文芸コンクール

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。入選作は順次掲載します。

次回は18日の予定

現代詩 ● 佳作③

あの話

武内 しゅり 作

たけうち・しゅり　本名・武内珠里（たけうち・しゅり）。2004年生まれ。横浜雙葉高校1年。横浜市中区。

あくびの出る夜に帰ってきた
あなたの目に光るものが
ありました
あやしいです
あさっての方を見てますけど
あっちに何かあるんですか
あたしは
あなたを微笑ませる紅茶にも
あなたを無邪気にさせるテレビの犬にも
あなたを大笑いさせるエッセイにも
あれれ、負けてますね
あっ、じゃあ
あなたのそれを吹き飛ばすのではなく
あなたのそれを思い切り流せるように
お風呂でも沸かしてあげましょうね
あ　が、　お　になりましたね
えがおになった方がいいですかね
あの湯が温まるまで
あしたを遅らせてはもらえませんか

講　評

ちょっとした言葉遊びの詩だが、ただ、それだけではない。あなたとあたしの関係、その状況が何なのか、想像させるように書かれている。第一行の表現もうまいし、最終行もよかった。言葉のセンスがあるのだろう。今後に期待する。

（審査員・金井　雄二）

金子　郁夫　画